

平城宮第一次大極殿院地区の調査 (平城第612次)

奈良文化財研究所では、1959年以来、継続的に第一次大極殿院地区の発掘調査をおこなってきました。今回の調査は、国土交通省による第一次大極殿院の復原整備にともなうものです。

これまでの調査成果から、第一次大極殿院地区の遺構は、大きく3つの時期に分かれることがあきらかになっています。Ⅰ期は奈良時代前半(第一次大極殿院の時期)で、東西約180m、南北約320mの範囲を築地回廊で囲み、北に大極殿を建て、その南を磔敷の広場とします。現在、南門の復原工事が進められています。Ⅱ期は奈良時代後半(称徳天皇の西宮の時期)で、南北幅を狭めて内裏と同規模の区画(東西約180m、南北約190m)をつくり、区画内の北半分に多数の掘立柱建物を建てます。Ⅲ期は平安時代初頭(平城太上天皇の西宮の時期)で、Ⅱ期とほぼ同じ場所に区画施設をつくり、その内側に多数の掘立柱建物を建てます。また、区画の外側にさらに堀(外郭堀)をめぐるせます。

今回の調査地は、奈良時代には、第一次大極殿や西宮の東面を区画する施設の東側にあたり、平安時代初頭には、平城太上天皇の西宮の東外郭堀が想定される場所です。調査期間は2019年4月5日から

8月2日まで、調査面積は400㎡です。

調査の結果、平安時代初頭の南北堀1条と南北溝2条を、約23mにわたって検出しました。これまでの調査でも確認している遺構で、平城太上天皇の住まいの東辺を区画する堀と、それにともなう排水溝と考えられます。

南北堀は、調査区の西部で掘立柱の柱穴10基を検出しました。北と南はさらに調査区外へ続きます。柱穴の多くは、掘方が一辺約50cmの隅丸方形ないし円形をしています。柱間寸法は一定ではなく、1.9～2.7m(6.5～9尺)です。

これまでの調査成果から、この南北堀は全長約235mであること、今回の調査区北端から約110m北で推定大膳職地区の東を限る築地堀に取り付くこと、今回の調査区南端から約100m南で西に折れること等が判明しています。

南北溝は、南北堀の東西両側を堀に並行して流れる素掘りの溝で、いずれも幅約1m。深さは堀の東側の溝が約20cm、西側の溝が約35cmです。北と南はさらに調査区外へと続きます。

今回の調査では、奈良時代の顕著な遺構は確認できませんでした。これまでの調査でも遺構の密度は低く、第一次大極殿院や称徳天皇の西宮の東側は、奈良時代を通じて空閑地として保たれ続けた可能性が高いとみられます。

6月7日には、現地説明会を開催しました。雨の降りしき中、また平日にもかかわらず、180名の方にお越しいただきました。

第一次大極殿院地区の発掘調査はこれで一段落となりますが、平城宮跡には未発掘の場所がまだ多く残っています。今後の調査の進展に、どうぞご期待ください。(都城発掘調査部 桑田 訓也)



調査区全景(南東から)



現地説明会の様子